付録 K 干渉計の出力粒子数揺らぎと位相感度

K. 1 干渉計の出力粒子数の揺らぎ

光干渉計であれ原子波干渉計であれ,干渉計の出力ポートで観測される粒子数nが干渉計の出力信号に対応する.そして,一般に観測される粒子数には揺らぎ Δn が伴う.ここでは,入力状態が①粒子数状態(フォック状態),②コヒーレント状態の二つの場合について,この Δn を求める.その際,入力状態が時間発展するシュレーディンガー表示よりも,演算子が時間発展するハイゼンベルグ表示の方が便利である.そこで,まず図 K.1(a)のような透過率 Tのビームスプリッターの動作をハイゼンベルグ表示で考える.ビームスプリッターの入力ポートa,bの消滅演算子を \hat{a},\hat{b} とし,これらはボソンの交換関係 $[\hat{a},\hat{a}^{\dagger}]=[\hat{b},\hat{b}^{\dagger}]=1$ を満たすものとする.ここで考える粒子は,ボゾンであれば光子でも原子でもよい.出力ポートc,dのハイゼンベルグ表示における消滅演算子 \hat{c},\hat{d} は,粒子間相互作用がなければ入力ポートの消滅演算子 \hat{a},\hat{b} と以下の線形関係で結ばれる:

$$\begin{pmatrix} \hat{c} \\ \hat{d} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \sqrt{T} & -\sqrt{1-T} \\ \sqrt{1-T} & \sqrt{T} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \hat{a} \\ \hat{b} \end{pmatrix}.$$
 (K.1)

実際, \hat{c} , \hat{d} はボゾンの交換関係を満足している:

$$[\hat{c}, \hat{c}^{\dagger}] = [\sqrt{T}\hat{a} - \sqrt{1 - T}\hat{b}, \sqrt{T}\hat{a}^{\dagger} - \sqrt{1 - T}\hat{b}^{\dagger}] = T[\hat{a}, \hat{a}^{\dagger}] + (1 - T)[\hat{b}, \hat{b}^{\dagger}] = 1$$
 (K.2)

$$[\hat{d}, \hat{d}^{\dagger}] = [\sqrt{1-T}\hat{a} + \sqrt{T}\hat{b}, \sqrt{1-T}\hat{a}^{\dagger} + \sqrt{T}\hat{b}^{\dagger}] = (1-T)[\hat{a}, \hat{a}^{\dagger}] + T[\hat{b}, \hat{b}^{\dagger}] = 1. \tag{K.3}$$

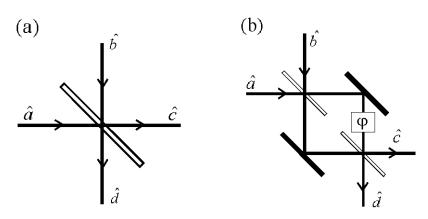


図 K.1 (a) 演算子によるビームスプリッターの定式化. 出力ポートの消滅演算子 \hat{c},\hat{d} は、入力ポートの演算子 \hat{a},\hat{b} と線形関係 (K.1) で結ばれる. (b) マッハ・ツェンダー干渉計も、ビームスプリッターと同様に入出力ポートの消滅演算子を定義できる.

また、各ポートの粒子数演算子を $\hat{n}_x \equiv \hat{x}^\dagger \hat{x}$ (x=a,b,c,d) とし、出力ポートの粒子数の期待値を計算すると、

$$\begin{split} &<\hat{n}_{c}> = <(\sqrt{T}\,\hat{a}^{\dagger}-\sqrt{1-T}\,\hat{b}^{\dagger})(\sqrt{T}\,\hat{a}-\sqrt{1-T}\,\hat{b})> \\ &=T<\hat{n}_{a}>-\sqrt{T(1-T)}\,(\hat{a}^{\dagger}\,\hat{b}+\hat{b}^{\dagger}\,\hat{a})+(1-T)<\hat{n}_{b}> \end{split} \tag{K.4}$$

$$\begin{split} &<\hat{n}_{d}> = <(\sqrt{1-T}\,\hat{a}^{\dagger} + \sqrt{T}\,\hat{b}^{\dagger})(\sqrt{1-T}\,\hat{a} + \sqrt{T}\,\hat{b})> \\ &= (1-T) <\hat{n}_{a}> + \sqrt{T(1-T)}(\hat{a}^{\dagger}\hat{b} + \hat{b}^{\dagger}\hat{a}) + T <\hat{n}_{b}> \end{split}$$
 (K.5)

となり、入力粒子数と出力粒子数の間には粒子数保存則

$$\langle \hat{n}_a \rangle + \langle \hat{n}_b \rangle = \langle \hat{n}_c \rangle + \langle \hat{n}_d \rangle$$
 (K.6)

が成立している.

上記の定式化は、そのまま図 K.1(b)のマッハ・ツェンダー干渉計に拡張できる。ビームスプリッターの場合と同様に入力ポートの消滅演算子を \hat{a} , \hat{b} ,出力ポートの消滅演算子を \hat{c} , \hat{d} とすると、これらの間には以下の関係式が成立する:

$$\begin{pmatrix} \hat{c} \\ \hat{d} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} t & -r \\ r & t \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \hat{a} \\ \hat{b} \end{pmatrix}$$
 (K.7)

ただし,

$$t = -\frac{1 + e^{i\varphi}}{2}, r = -\frac{1 - e^{i\varphi}}{2}.$$
 (K.8)

この干渉計は,位相差 φ に依存する透過率 $|t|^2$ (= $1-|r|^2$) を持つビームスプリッターとみなすことができる. 実際(K.7) で定義した \hat{c} , \hat{d} はボゾンの交換関係を満たし, $|t|^2+|r|^2=1$ より粒子数保存則(K.6)も成立する.

ここで、干渉計の出力ポートcで観測される粒子数の期待値 $<\hat{n}_c>$ を計算すると、

$$<\hat{n}_{c}> = <\hat{c}^{\dagger}\hat{c}> = <(t\hat{a}-r\hat{b})(t^{*}\hat{a}^{\dagger}-r^{*}\hat{b}^{\dagger})>$$

$$= |t|^{2} <\hat{n}_{a}> + |r|^{2} <\hat{n}_{b}> - < tr^{*}\hat{a}\hat{b}^{\dagger}+t^{*}r\hat{a}^{\dagger}\hat{b}>$$
(K.9)

となる. 特に,入力ポートb が真空状態 $|0>_b$ の場合, $\hat{b}|0>_b=0$, $\hat{b}^\dagger|0>_b=|1>_b$ より式 (K.9) の右辺第2項および3項はゼロになり,

$$<\hat{n}_{c}>=|t|^{2}<\hat{n}_{a}>=<\hat{n}_{a}>\frac{1+\cos\varphi}{2}$$
 (K.10)

となる. これが干渉計の出力信号となる.

次に、干渉計の出力ポートcで観測される粒子数の揺らぎく Δn_c > を考える.ここでは各ポートの粒子数揺らぎく Δn_x > を粒子数の分散 $<(\Delta n_x)^2$ > $=<\hat{n}_x^2$ > $-<\hat{n}_x$ > 2 の平方根で定義する(つまり $<\Delta n_x$ > 2 = $<(\Delta n_x)^2$ >).出力ポートd の粒子数の分散 $<(\Delta n_c)^2$ > を、入力ポートb が真空状態の場合について計算すると以下のようになる:

$$\begin{split} &< (\Delta n_c)^2> = <\hat{c}^{\dagger}\hat{c}\hat{c}^{\dagger}\hat{c}> - <\hat{c}^{\dagger}\hat{c}>^2 \\ &= <\hat{c}^{\dagger}(\hat{c}^{\dagger}\hat{c}+1)\hat{c}> - |t|^4 <\hat{a}^{\dagger}\hat{a}>^2 \\ &= <\hat{c}^{\dagger}\hat{c}^{\dagger}\hat{c}\hat{c}> + <\hat{c}^{\dagger}\hat{c}> - |t|^4 <\hat{a}^{\dagger}\hat{a}>^2 \\ &= |t|^4 <\hat{a}^{\dagger}\hat{a}^{\dagger}\hat{a}\hat{a}> + |t|^2 <\hat{a}^{\dagger}\hat{a}> - |t|^4 <\hat{a}^{\dagger}\hat{a}>^2 \\ &= |t|^4 <\hat{a}^{\dagger}(\hat{a}\hat{a}^{\dagger}-1)\hat{a}> + |t|^2 <\hat{a}^{\dagger}\hat{a}> - |t|^4 <\hat{a}^{\dagger}\hat{a}>^2 \\ &= |t|^4 \left(<\hat{a}^{\dagger}\hat{a}\hat{a}^{\dagger}\hat{a}> - <\hat{a}^{\dagger}\hat{a}>^2\right) + |t|^2 <\hat{a}^{\dagger}\hat{a}> - |t|^4 <\hat{a}^{\dagger}\hat{a}> \\ &= |t|^4 <(\Delta n_c)^2> + |t|^2 |r|^2 <\hat{n}_c>. \end{split}$$

この結果を用いて、入力ポートaの状態が①粒子数状態、②コヒーレント状態の二つの場合について出力ポートcの粒子数の分散および揺らぎを具体的に計算すると、

①粒子数状態 | N > の場合

$$<\hat{n}_{a}>=N\,, \quad <(\Delta n_{a})^{2}>=<\hat{n}_{a}^{2}>-<\hat{n}_{a}>^{2}=N^{2}-N^{2}=0 \ \ \sharp \ \ \emptyset\,\,,$$

$$<(\Delta n_{c})^{2}>=0+|t|^{2}|r|^{2}\ N=|r|^{2}<\hat{n}_{c}>=\frac{N}{4}\sin^{2}\varphi \ \ (\mathrm{K}.12)$$

$$<\Delta n_c> = |r|\sqrt{\langle n_c\rangle} = \frac{\sqrt{N}}{2}|\sin\varphi|$$
 (K.13)

②コヒーレント状態 $|\alpha>_a$ の場合

$$<\hat{n}_{a}>=|\alpha|^{2}, <(\Delta n_{a})^{2}>=<\hat{n}_{a}^{2}>-<\hat{n}_{a}>^{2}=(|\alpha|^{4}+|\alpha|^{2})-|\alpha|^{4}=|\alpha|^{2}$$
 & 9

$$<(\Delta n_c)^2>=|t|^4|\alpha|^2+|t|^2|r|^2|\alpha|^2=|t|^2|\alpha|^2=<\hat{n}_c>$$
 (K.14)

$$<\Delta n_c> = \sqrt{<\hat{n}_c>} = \left|\cos\frac{\varphi}{2}\right| |\alpha|$$
 (K.15)

このように、出力の平均値に対する揺らぎの比 $<\Delta n>/<n>$ は、入力が粒子数状態でもコヒーレント状態でも $1/\sqrt{<n>}$ に比例する。粒子数の分散が平均値に等しくなるような揺らぎ($<(\Delta n)^2>=<n>$)は一般に**ショット雑音**と呼ばれるが、入力がショット雑音を持つコヒーレント状態の場合、出力もショット雑音を持つことが式(K.14)からわかる。一方、粒子数揺らぎがゼロである粒子数状態が入力の場合は、式(K.12)より $<(\Delta n)^2>=|r|^2<n> (0 <math>\le |r|^2 \le 1$) であるので、ショット雑音以下の出力が得られる。

K.2 干渉計の位相感度

干渉計の位相感度を、干渉計が識別し得る最小の位相差 $\Delta \varphi$ と定義する。干渉計の出力としてポートcを用いるとすると、 $\Delta \varphi$ は以下のような式で表現できる:

$$\Delta \varphi = \left| \frac{\partial \varphi}{\partial \langle \hat{n}_c \rangle} \right| \langle \Delta n_c \rangle = \left| \frac{\partial \langle \hat{n}_c \rangle}{\partial \varphi} \right|^{-1} \langle \Delta n_c \rangle . \tag{K.16}$$

式 (K.10) より
$$\frac{\partial <\hat{n}_c>}{\partial \varphi}=<\hat{n}_a>\frac{\partial}{\partial \varphi}\frac{1+\cos\varphi}{2}=-\frac{<\hat{n}_a>}{2}\sin\varphi$$
 であるので、式 (K.16) は

$$\Delta \varphi = \frac{2 < \Delta n_c >}{<\hat{n}_a > \left| \sin \varphi \right|} \tag{K.17}$$

と表せる.入力が粒子数状態 $|N>_a$ の場合は,式(K.13)より

$$\Delta \varphi = \frac{1}{\sqrt{N}} \tag{K.18}$$

となり、位相感度は φ の値に依らない。一方、入力がコヒーレント状態 $|\alpha>_a$ の場合は、式 (K.15) より

$$\Delta \varphi = \frac{1}{|\alpha| |\sin(\varphi/2)|} \tag{K.19}$$

となり、位相感度は ϕ に依存する.